

学位論文の要旨

保健学専攻 生涯保健学 成人保健学	分野 領域	氏名	山口 大輔
題目 Assessment of Depressive Tendency, Coping Strategies and Type D Personality in Japanese Patients with Coronary Artery Disease (日本人の冠動脈疾患患者における抑うつ傾向、コーピング方略、およびタイプDパーソナリティに関する検討)			
要旨 【背景・目的】 社会的抑制と否定的な感情を特徴とする性格傾向であるタイプDパーソナリティ（以下、タイプD）は、冠動脈疾患（CAD）の心理的危険因子として注目されている。タイプDのCAD例では、約76%が著しい不安と抑うつ症状を経験し、抑うつ症状があるCAD例の2年後の死亡率は、抑うつ症状のないCAD例の2倍以上との報告もある。CAD例のさらなる心血管イベントを防ぐには、抑うつに対する介入が必要である。本研究の目的は、日本のCAD例における抑うつ傾向の自己評価と、コーピング方略、タイプD、および社会人口学的または臨床的要因との関連を明らかにすることである。 【方法】 経皮的冠動脈インターベンションを受けた入院中のCAD例を対象に、無記名自記式質問紙調査を実施した。使用尺度は、Zung Self-Rating Depression Scale、Type D Personality Scale、およびTri-Axial Coping Scale 24であり、それぞれ抑うつ傾向、タイプD、およびコーピング方略を調査した。分析は、多重ロジスティック回帰分析を用いて、抑うつ傾向に関連する特性を特定した。また、タイプD例と非タイプD例のコーピング方略の下位尺度得点をMann-WhitneyのU検定で比較した。 本研究は、信州大学医学部医倫理委員会の承認を受けて実施した。 【結果】 調査用紙の回答者は108例であった。調査項目に欠損があったものを除外し、100部（有効回答率：92.6%）を分析対象とした。59例が抑うつ傾向であり、44例がタイプDであった。多変量解析の結果、抑うつ傾向は、タイプD（オッズ比[OR] = 2.78、95%信頼区間[CI] [1.06、7.24]、P = 0.037）、常勤勤務者（OR = 0.23、95%CI [0.08、0.64]、P = 0.005）と有意に関連していた。また、コーピング方略の下位尺度の「放棄または諦め」（OR = 1.33、95%CI [1.07、1.65]、P = 0.010）と有意な関連を認めた。タイプD例は非タイプD例に比し、コーピング方略の「放棄または諦め」が有意に高値（P = 0.002）であり、「肯定的解釈」が有意に低値（P = 0.004）であった。 【考察】 「放棄または諦め」のコーピング方略は、心理的ストレス要因からの一時的な逃避を行うことは可能であるが、現実を変化させ、心理的ストレス要因を解消することは困難である点でネ			

がティブなコーピング方略である。CAD 例は、複数の薬物治療、食事制限、特に二次的な心血管イベントのリスクに対する懸念が増しているため、退院後にさらにストレスを受ける可能性がある。これらのストレスは、生活の質を低下させ、抑うつ傾向のリスクを高めると考えられ、タイプ D の CAD 例で不足しているポジティブなコーピング方略の実施が必要と考える。

また、常勤勤務者へのストレスチェック等の対応が、少なからず抑うつへの傾向を予防していると考えられる。退院後のメンタルヘルスケアは、パートタイム労働者や失業者に特に焦点を当てていくべきであることが示唆された。

【結論】

CAD 例に高頻度で認めた抑うつ傾向は、タイプ D と「放棄または諦め」のコーピング方略と関連し、常勤勤務者と負の関連を認めた。CAD 例では、性格傾向を評価し、ポジティブなコーピング方略を実施できるように介入することが、抑うつ傾向の予防に有益である可能性が示唆された。

研究指導教員 信州大学学術研究院（保健学系）教授 松永 保子